

## 設立記念講演 **Darlithiau Agoriadol 2)**

付帯状況表現 : **dan** と **gan**

水谷 宏

**'Dan' a 'Gan': Mynegion Cyd-ddigwyddiad  
gan Hiroshi Mizutani (Hywel Glyndŵr)**

### 要旨 **Crynodeb**

1) カムライグ語 **Yr Iaith Gymraeg** の文法的記述は、長い間、「文章カムライグ語」**Cymraeg Llenyddol / Literary Welsh** の桎梏の中にあって、「話し言葉カムライグ語」**Cymraeg Llafar / Colloquial Welsh** への極めて消極的な態度となつて現れた。他の多くの言語においても、この傾向は見られるのであるが、カムライグ語の歴史においては、「話し言葉」の標準化が生じなかったため、この傾向は一層顕著に見られる。2) いわゆる「付帯状況表現」**Mynegion Cyd-ddigwyddiad** (同時生起表現)と呼ばれている **dan** や **gan** の用法についても、「文章語」と「口語」という「様式 (Mode)」により異なる。3) しかし、この「様式」の観点だけではなく、「より公式的な使い方」か「よりくだけた使い方」か、という、「言語使用域」**Register** の観点からも見直してみる必要がある。そうすることによって、カムライグ語の学習上においてもいくつかの利点が生じる。

**Esgeulusir Cymraeg llagar yn disgrifio gramadeg yr Iaith Cymraeg.**

**Mae'r ddarlith hon yn ceisio esponio'r mynegion 'Cyd-ddigwyddiad', 'dan' a 'gan' o'r safbwynt sydd yn disgrifio 'Cofrestrau' o 'Gymraeg Llafar'.**

### 1 背景事情 **Sefyllfa Gefndir**

#### a) 「文章語」と「話し言葉《口語》」の相違

一般的に言って、言語には、「文章語」と「話し言葉《口語》」との間には何らかの相違が観察される。カムライグ語も決して例外ではない。むしろ、この相違は、他の多くの言語と比較してみても、相当に大きいと言える。「話し言葉」では、「私は、カムライグ語を話すのが好きです」と言う場合に、北部方言と南部方言とで、次のような相違が見られる。

(1) [duin 'hofi 'ʃara(d) 'km \ra:ig] (北部方言、以下、G.C. と略す。)

(2) [uin 'hofi 'ʃara(d) 'kum \ra:g] (南部方言、以下、D.C. と略す。)

一方、「文章語」では、

(3) **Yr ydwyf fi yn hoffi siarad Cymraeg. (G.C.)**

(4) **Yr wyf fi yn hoffi siarad Cymraeg. (D.C.)**

のように書き記されるのである。

即ち、(1) では、「繫辞」**cyplad / linking verb** の **bod** 'to be' の「現在・一

人称・単数」の形が、[dui] を用いているのに対して、(2) では、[ui] が用いられている、という方言的特徴が観察される。そして、いずれの方言においても、「話し言葉」にしばしば観察される特徴である、閉鎖子音が連続する場合に生じる最初の子音の脱落が、[,sara(d)] の語尾に生じる場合がある。「繫辞」の形に見られる方言的特徴は、「文章語」では、(3) の 'ydwyf' (G.C.) と、(4) の 'wyf' (D.C.) の形として現れているのである。

このような「文章語」と「話し言葉」の間に見られる相違に注目して、Caradar (1925?:30) は、'WRITE literary Welsh. SPEAK colloquial Welsh' として、言語が使用される場面に応じて、相異なる二つの言語形式の使い分けを勧めている。1925 年という年代を考えると、極めて画期的な指導方法であったと言える。

#### 1-a-1) 社会階層的変種に関する発言

このような言語使用域 Register の相違に関して、特に、「社会階層的変種」と、1960 年代になって社会言語学が呼ぶようになった「変種」 amrywiaethau に言及した、筆者の手元にある資料で最も早い時期の発言は、Syr John Rhys (1896:81) である。即ち、「文章語」の標準化がなされた聖書のカムライグ語について言及した後、

*It is somewhat the same as regards a country gentleman, let us say, a landed proprietor or the squire, who learns Welsh in order to be able to converse with the men in his employ. Thus if he addresses them in literary Welsh, he commands their respect without appearing too affable or provoking familiarity, but if he learns his Welsh from a stable-boy, his style of speaking provokes derision.'*

そして、Syr Ifor Williams (1945?:52) にも、次のような発言がある。

*'Wrth ddarlithio ar Lafar Gwlad byddaf yn rhannu Cymraeg yn dri math, Cymraeg llyfr, Cymraeg llafar a Chymraeg dydd Sul, . . . Y mae gwahaniaeth rhwng Cymraeg pregethwr a Chymraeg y bobol. Nid yw pregethwr yn siarad fel dyn arall.' (下線は筆者)*

即ち、

*「日常のことばについてお話する場合、わたくしは、カムライグ語を 3 種類に分けることにしています。つまり、書物のカムライグ語と話し言葉のカムライグ語、それに、日曜日のカムライグ語であります。《中略》牧師さんのカムライグ語と、一般の人達のカムライグ語との間には、明らかな違いがあります。普通の人のお話にならないのが、牧師さんなのです。」*

さらには、1960 年代後半以降の社会言語学が導入した「打ち解けた、くつろい

だ使い方」から「形式張った、正則の、公式的な使い方」への「段階的变化」(“a scale” from “casual / informal” to “formal / ceremonial”という、所謂「言語使用域」Cofrestrau / Registers への明らかな言及もみられるのである。

‘Swm a sylwedd y cyfan a ddywedais yw y dylid codi'r iaith lafar yn nes i iaith lyfr, er mwyn cael iaith lafar addas i genedl ac nid i gwmwd neu blwy. Ac wedi i ni gael honno, dylem, mi greda i, daro ati i ystwytho a diweddarau ein Cymraeg llyfr, a'i ddwyn ynteu yn nes i Gymraeg byw. Ar hyn o bryd y mae gormod o fwllch yn canol, a rhaid ei gau o'r ddwy ochr. (t. 56.) (下線は筆者)

即ち、

「以上お話したことをまとめますと、話し言葉を高めて、書き言葉にもっと近づけるべきだということであり、そうすることで、話し言葉が、里や教区だけでなく、国全体のものになるのです。そうできれば、書物のカムライグ語を近代化して、より一層柔軟性のある「生きたカムライグ語」Cymraeg byw にずっと近づけることができると、わたくしは信じます。今のところは、両者の間の溝は大きすぎるので、両方から歩み寄る必要があります。」

#### b) 「話し言葉 (口語) カムライグ語文法」への消極的な態度

20世紀も終わりに近づいた1990年代には、カムライグ語に対する新しい視点に立ったいくつかの文法書が出版された。Fife (1990:8) には、次のような指摘もある。即ち、従来からの文法書の扱いでは、あるがままの姿ではなく、あるべき姿を求めているために、話し言葉について理解を深めることは困難であり、また、少数のエリートが書いたテキストだけが対象となっている「文献学的研究方法」では、話し言葉を対象とした分析がなされなかったという事実について述べているのである。

一方、学習者を対象にした会話書においても、1960年代の後半からは、話し言葉を提示しようとする動きがあり、批判はされたものの、所謂「生きたカムライグ語」Cymraeg Byw に準拠したテキストも数多く出版された。その批判には、話し言葉が標準化されると、誰も使っていないことばを教えることになるというものが含まれた。この批判に対応して、それぞれの地域で開催される会話のコースで用いられるテキスト類には、その地域の方言に準拠した教材もかなり出回ったようである。そうした口語への積極的な態度の表れの一つとして、King (1993:3)は、次のような点を指摘している。

‘One telling difference is as simple as it is fundamental: Colloquial Welsh is a first language for native speakers of Welsh. . . . It is acquired automatically from childhood, and native speakers have an intuitive

feel for what sounds 'right' or 'wrong'. Literary Welsh, on the other hand, is no-one's native language. All those who know how to read it, whether Welsh speakers or not, have been taught. In this sense it is an artificial language – consciously planned and designed to standardize the written language at the time of the translation of the Bible into Welsh (sixteenth century), and by and large with a deliberate disregard for the native speech of ordinary people. Its subsequent undoubted success as the medium of a prolific literature has been at the expense of Colloquial Welsh, neglected and relentlessly disparaged by a powerful (Welsh-speaking) minority who had much to gain from putting the main means of expression of the cultural identity out of the reach of the majority.'

この間の詳しい状況については、筆者は、先に「南北方言の特徴と地域変種への消極的関心」『金城学院大学論集（英米文学編）』第42号《通巻第189号》pp. 313-329において指摘した通りである。

「文章カムライグ語」と「口語カムライグ語」との間の大きい相違についての認識を深めると共に、「話し言葉」への関心を高めることは、単に、言語研究の分野に限ることなく、文学、歴史等々、その他のカムライグ学 *Astudiaethau Cymreig* の諸分野の研究においても重要性が増すものと考えられる。

## 2 前置詞 *dan* と *gan*

A)辞書による定義やB)文法書の取り扱いを見ても、この二つの前置詞が動詞的名詞に先行する場合の用法は、次のようになっている。

*Dan* = 主節の動詞が表す動作とは関係のない動作が、同時に生じる場合

*Gan* = 主節の動詞が表す動作の一部となる動作が、同時に生じる場合

そして、このような文章語カムライグ語の文法的記述の取り扱いは、Williams (1959:178) (1980:136) や、Thorne (1996:400-401) に見られるように、次第に混用が進行した結果、この区別がなくなったとみなしてよい。

一方、日常会話の専修を目標にした所謂会話書には、この二つの前置詞のこの用法は、先ず、扱われることがない。扱われたとしても、日常の会話に用いられる用法としてではなく、「物語やスピーチをきちっと話す」ための能力を習得させる段階になってから導入されるのである。そして、「付帯状況表現」なり、「同時生起表現」と呼ばれる用法は、文章語とは異なり、*dan* や *gan* を用いるのではなく、等位接続詞の *a* 'and' が用いられ、「～する(した)、そして、～する(した)」のように用いられる。あるいは、接続詞 *pan* 「～する(した)時」に導かれる従属節で表現されるのである。

### 3 口語形認定基準について

現代カムライグ語の使用状況を、このように「文章語」と「話し言葉」の両面で観察する場合、口語形を認定する基準が必要になる。Morris Jones, R. (1974) は、(1) 発音上の相違、(2) 形態音素論的相違、(3) *wedi* の縮約形の使用の有無、(4) 時制の使用上の相違、(5) 決定詞と形容詞の使用、(6) 動詞前虚辞の脱落、そして (7) 英語からの借用語の多用、等々を挙げて、両者を区別しようとしている。

しかし、筆者は、水谷宏 (1977:27-28; 1986:261-262) において、I [書き言葉] (*written*) か [話し言葉] (*spoken*) かの「様式 (mode)」変数、II [視覚的] (*visual*) か [聴覚的] (*aural*) かの「手段 (medium)」変数に加え、III [固さ] (*tight*) か [緩さ] (*loose*) か、の「拘束性」'stricture' --- 「文法の持つ拘束性からの自由さの度合い」という変数を加えた方法で、「より文章語的」か「より話し言葉的」か、の判断をする基準を提案した。即ち、単に、「書かれている」か「話されている」だけでは、「文章語形」と「口語形」との区別は十分にはできない。前者が口頭で音声化される場合もあり、また、逆に後者が文字を用いて表記されることも多い。あるいは、前者が「緩さ」を示すときには、後者に近づくことがあり、反対に、後者が「固さ」の要素を強く含むと、極めて前者に近い発話になることもある。従って、その発話が、(+*spoken+aural+loose*) であれば、極めて親しい間柄の人同士が用いる、日常的で、いわゆる「自然な」会話の発話であり、反対に、「もっとも文法の拘束性に厳密な形で、公文書等に見られるような形」の「文章表現」は、(+*written+visual+tight*) だと分析可能なのである。

1980年代以降に出版された会話書の類には、*dan / gan* を用いた「付帯状況・同時性表現」が扱われることが極めて少ないからと言って、現実にはまったく使用されないのではなく、(+*tight*) に近づくにつれて、その使用は十分に可能であると判断すべきである。例えば、

Mae'r merched 'na'n eistedd ar y stryd *gan fwyta* hufen iâ.

「あそこの女の子たちは、アイスクリームを食べて地べたに座っている」

O'n i'n darllen llyfr *dan wrando* ar dâp.

「僕、テープを聴きながら本を読んでいたよ」

のような話し方も可能なのである。

#### 参考文献

Caradar (1925?): *Welsh Made Easy*, Parts I & II, Wrexham: Hughes & Son

Fife, J. (1990): *The Semantics of the Welsh Verb, a cognitive approach*, Cardiff: Univ. of Wales.

Jones, R. Morris (1974): 'Literary and Colloquial Welsh: Some Points of Divergence'

*Studia Celtica Japonica*, no. 8: 1-14.

King, G. (1993): *Modern Welsh, a comprehensive grammar*, London: Routledge.

水谷宏 (1977): 「現代口語ウェールズ語文の構造=序説」『本位田重美先生定年記念論文集: 地域と文化』 23-50.

Mizutani, Hiroshi (1986): 'Welsh Lenition and the Function of Pre-verbal Particles' *Journal of Indo-European Studies*, vol. 14, nos. 3 & 4, 261-262.

Rhŷs, Syr John (1896): 'Chap. VIII. Linguistic Conditions: Welsh and English', *Royal Commission on Land in Wales and Monmouthshire Report*, 78-97.

Thorne, D. A. (1996): *Gramadeg Cymraeg*, Llandysul: Gomer.

Williams, Syr Ifor (1945?) 'Cymraeg llwyfan' *Meddwn i*, Llandeibie: Llyfrau'r Dryw, 52-56.

Williams, S.J. (1959): *Elfennau Gramadeg Cymraeg*, Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru.

Williams, S.J. (1980): *A Welsh Grammar*, Cardiff: Univ. of Wales.